

らむろげんだ 「らむろげんだを見よ。

らんけん さるべ、らしや、すためん、かるさい、らんけん、繻子、天鷲絨(博多)

和蘭語(Laken)の訛。羅紗を云ふ。長襦袢に、ラーケンとは和蘭語にて、羅紗のことを云ふと見えてゐる。

らんじのひもん その身も日笠さしかげさせ、らんじの秘文を繰掛け繰掛け(繰懸天璽)

【聖号秘文】火焰の秘文である。「らん」は地水火風空の五大中、火大の種子であつて法界生の火神を表す。秘密眞言執行要覽に「ま字法界生火神、即是毘盧遮那一切智智體也」

らんじや 「らんじやたいを見よ。

らんしやう 無間の鐘の濫觴を尋ねれば(博多) 此鐘の濫觴は龍宮の紫金を取つて、世尊火境三昧の踊輪をもつて(用明天皇)

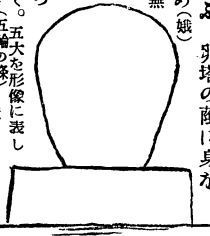
【濫觴】原始をいふ。家語三冠篇に「江始出于岷山、其源可謂濫觴」とあるより出づ。
らんじやたい 帝より給はりし蘭奢待の名香内兜にたきしめん(吉野忠信) 御臺所は櫓の上らんじやくゆらせ(三國志) 蘭野の梅が香や(國性鏡)

【蘭奢待】聖武天皇の御宇に唐朝から奉獻し、奈良の東大寺正倉院勅封御庫に傳來せる名香で、御物となつて現存し本名を實然香といふ。末細く下木く胸部の一方は空疎である。長さ五尺一寸、重さ三百五百目あるといふ。蘭奢待は支那にて蘭奢と記し、蘭と聲香の如き芳香ある處、これを蘭奢待と記すは東大寺の名を寓したるもので、即ち蘭の中に東の字、

室の上に大の字、待の右に寺の字を含ませたものであるといふ。

*らんたふ 卵塔の蔭に身をひそめ(娘)

【卵塔無縫塔を其形鳥卵の如きものにつく。五大を形象に表して五輪塔(五輪の塔)を造り、更にこれを一印含んで大日如来として統一し卵塔を造らんとてんぐさり 大将頼義公はらんでん鎖の御着長着込になされ(大掛物) らんでん鎖の壘み具足(酒吞童子枕言葉)



〔塔 卵〕

細かな羅の上に紋織を入れたもので、八重鎖なる由貞丈の説なれど、詳でない。

らんばこ 下女たる者に持たせた覽箱開いて一通の文を取出し(今川了俊) 院宣のらん箱は文覺上人開き給へば(伊豆日記)

【覽箱】故實要抄に「覽箱。是節會等の時宣命を入るる宮也」と見えてゐる。覽箱は元來節箱の變子である。宮女が腰に就くとき、櫛箱の變子を枕邊に置いて垂簾を其箱の中に入れられたによつて亂箱と稱したのが、宣命を入れる箱にもなつて覽箱とも書き、後には一般に文書などを入れて、文匣、手箱と同種類となつたのである。

らんばじん 鳩糞茶夜叉神、藍婆神、この神國に害をなさせ(振袖始)

【藍婆神】藍婆鬼ともいひ、正法華經に結縛と翻し、十羅刹女の一である。「くみやうかうた」の條を見よ。源平盛衰記に「承暦元年の

眷藍婆鬼といふ鬼京中にみちみちて、十歳以前の少者が八九はとり失はれければ。

*らんばふう 汝が信心一天下に知らせんと我慢に灯す萬燈なれば、汝が一念らんば・びらんばの悪風となつて萬燈を一時に打消し(羅迦如來誕生會) 前へ走ればらんば風、後へ戻ればびらんば風、烟は咽に息切れて(羅迦如來誕生會)

【藍婆風】藍婆は運と譯す。速力の遅い風をいふ。「びらんばふう」を見よ。

*らんぶ お主の敵は打忘れ盤上亂舞の遊び事(甚樂太平記)

【亂舞】能樂にて演戲の間に「きし」と舞ふもの。

らんよ・しよくしや 鸞輿屬車の玉衣の隙間の風もいとひしに(鶯九)

【鸞輿屬車】鸞輿は天子の垂輿をいふ。鸞は鸞とも書き、鸞鈴を備へたので、鸞鈴は鸞鳥の聲の和するに似つたのである。班固の西都賦に「乘鸞輿御法駕に、貞觀政要に「鸞輿在」前、屬身車後矣。屬車は天子の御輿に従つて臣下の乗る車。「古へは一夜とまりし宿までも云云」を見よ。

らんるてう 「えんまそつまこんをばくして云云」を見よ。

りうえい すばといばば柳營の御所

駝付げんす心懸け(虎が懸)

【稱善將軍の陣屋をいふ。柳營は細柳營の略である。漢書周勃傳に「文帝後六年匈奴大入邊、以宗正劉緄爲將軍、軍霸上、祝茲侯徐廣爲將軍、軍棘門、以河內守尉亞夫爲將軍、軍細柳、以備胡、上自勞軍至霸上及棘門直馳入、將以下馳出入邊、已而之細柳軍、軍士吏被甲、銳兵刃、勁弓、持滿、天子之先驅至不得入、先驅曰天子且至、軍門都尉曰軍中聞將軍令、不聞天子之詔、有頃上至又不符、符入、於是上使使持節詔將軍曰、吾欲勞軍、亞夫適何言聞、壁門、壁門士聽將軍令曰、將軍約軍中不得驅馳、於是天子遂按轡徐行、至中營、軍將亞夫曰、介冑之士不拜請以軍禮見、天子爲動改容、式、軍使二人稱謝、皇帝敬勞將軍、成禮而去、既出、軍門、群臣皆驚、文帝曰嗟乎此真將軍矣、卿者上棘門直馳入、其將固可觀而廢也、至於亞夫、可謂得而犯耶、卿之善者久矣。」とある故事によつて將軍の陣屋を柳營とす。

りうきうむしる 蝦夷が千鳥や朝鮮國、琉球筵敷島、この日の本の外までも(卯月紅巻)

【琉球筵】琉球から進出する筵で、苳草を織つたもので剛毅久しきに耐へる。和漢三才圖會卷三十二、象師具の部、筵の條に「琉球筵以苳草織之、剛毅耐久、又名御倉筵(御倉者琉球島之名、出於豐後府內)者、似琉球筵而薄、其色微青、故呼曰青琉球云々、異林子のこの文は、琉球といふに琉球筵をひかけて、筵は敷く縁から敷島にいつづけられたのである。

りうくわう りうくわうりうくわう

瑪瑙の鞭(小栗判官)

【流黃】玉の名。辭源に「流黃、玉也(淮南子)流黃出而朱草生」と見えてゐる。

りうくわゑん 夜半樂の梅が香に柳花苑もなつかし(三國志)

りうご 橋立が兩の腕首りうごになれとしつかと括り(持統天皇) 黒羅紗のりうご鞘、同じく桔梗十文字、紺に無紋の六尺は加賀に梅鉢百二十萬石(薩摩歌)

りうご 輪鼓鼓の胴をいひ、中の括られた形である(りうござや)

りうご 輪鼓鼓は鎗標(金澤城主、加賀宰相前田綱紀)である

りうごしや 「りうごしや」を見よ

りうせん 流れに響く御溝水、流泉啄木の曲をあやつるとはかかる事なや(反魂香)

りうてい 「りうてい」を見よ

りうはくろん 我先祖高皇帝、我は青田の劉伯温(國性爺)

りうはくろん 劉伯温(劉基)を伯温といひ、青田の人である。明太祖金陵に下るに及び謁して時務を陳した。これより常に帷幄に参り佐命の功があった。

りうはくろん 面白や劉伯温がもてあそび、今ここに酌め(船持)

りうはくろん 劉伶字を伯倫といひ、西晋時代沛國の人で、竹林七賢の一人である。放情肆志形

轍を土木となし、常に字を納め萬物を齊しうするを以て心とな。最も酒を嗜み縱酒放逸禮節で辱中に居る。人をも譲れば俗客で、我は天地を以て棟宇となし屋室を以て褊衣となす。諸君何ぞぞ我褊中に入ると言つたといふ。

りうらん なう悲しや父様、身にあやまりあればこそ段々のわび言、あんなまりりうん過ぎました(天網島)

りうらん 利運運の利にかなふことの義、轉じて主張の正し、有利なるを立にとること。合類大節用集言辭門に「利運」。

りきしや 折しも上人りきしやどもに張興昇かせ御歸寺ある(小栗判官)

りきむ 力者、刀彼の者の義、瀧龍昇、興昇、人走の類をいふ。

りきむ 見やうが悪いと死さぬと、聲をなまつてりきみける(二枚箱)

りきむ 今年の兼房血が枯れて智慧も枯れたるか、りきんでよくば去年の春なぞ腰越より歸りしぞ(藤原)

りきむ 力者(力者)を動詞マ行四段に活用させた語であらう。身に力をいれる。勢を張る。

りきむ 孔子は鯉魚に別れ、思ひの火をば胸に焚き(歌念佛)

りきむ 鯉魚名は鯉、字は伯魚、孔子の子である。「傳」へ聞く孔子は鯉魚に別れ云云を見よ。

りきむ 善惡二つを噛分けて、六義を正す柴崎に思案橋を思ひ出す(今宮) 物の筋道りくきを立て(生玉)

りきむ 六義周禮地官に「保氏養國子以道、教之六義、一曰祭祀之容、二曰賓客之容、三曰

朝廷之容、四曰喪紀之容、五曰軍旅之容、六曰車馬之容」と見えてゐる。轉じて六義を道理の義理の意にいふ。今宮心中のこの文に「いふは聖廟」を見よ。

りきむ 我敷島の歌の道もかくやあるべき、六義十體其様似たりとい(ども)持統天皇

りきむ 古今集の序に「こそも歌のさま六つなり」とありて、そへ歌、かぞへ歌、なすらへ歌、たとへ歌、ただごと歌、いはひ歌と見え、眞名序に「倭歌有六義、一日風、二曰賦、三曰比、四曰興、五曰雅、六曰頌」と見えてゐる。(玉勝間・十二)に「歌に六義といふことをやんごとなき事にするはいと愚なることなり、六義はこそこの國にて上代の詩にきたせることにもある、歌には更にきせることなし、歌にいふは古今集の序に歌のさま六つなりとて、その六くきを分けてあたるより起れることなるを、そはかのもうこの詩にならひて六くきに分けたれども、更にかなはぬことどもにて云云)。

りくわりくえふしくわしえふ 六花六葉四花四葉、これ定まりの花の法度(聖徳太子)

りくわりくえふしくわしえふ (六花六葉四花四葉)鑿鑿小鏡(貞享三年刊)、立花法度之事の條に「一枝に花三つあれば面(二つ)出すべし、五つあれば三つ也、一葉一花四葉四花六葉をきらふ也」。

りくわりくえふしくわしえふ 恥ぢず、六藝一つも缺かざること賞しても餘りあり(天神記)

りくわりくえふしくわしえふ (六藝)禮、樂、射、御、書、數、

りくわりくえふしくわしえふ 彼此開ける賢聖の(本朝用文章)

りくわりくえふしくわしえふ (陸修範)支那南北朝時代吳郡の人。文籍に通じ神仙を慕ふ。廬山東林寺に住み、陶淵明慕

りくわりくえふしくわしえふ 還法師と共に白蓮社を結ぶ。宋の文帝に召されて道を講ず。元徽五年歿す。年七十二。

りくわりくえふしくわしえふ 「りくわりくえふ」を見よ。

りくわりくえふしくわしえふ 二十四孝の陸績が橘を袖に入れ、氷に臥して魚を得しも、そればかりを孝行とて異國本朝譽めはせぬ(會稽出)

りくわりくえふしくわしえふ (陸績)二十四孝の一人である。字は公紀、吳の人、六歳の時に袁術の許に行く。術橘を置いて歸らうとして落した。術曰く陸郎賢客となつて橘を懐にするかと。績曰く橘實旨きによつて母に遺らうと思ひますと。術その孝心に感じたといふ。

りくわりくえふしくわしえふ 凡そ繪の道に六つの法あり、長庚・張僧・陸探の三人を異朝の三祖と學び來て(反魂香)

りくわりくえふしくわしえふ (陸探)陸探をいふ。宋時代吳の人。明帝の侍従となり、書を以て名を博した。

りくわりくえふしくわしえふ 「りくわりくえふ」を見よ。

りくわりくえふしくわしえふ 延喜の帝陸平永寶・駒曳錢を鑄させて(反魂香)

りくわりくえふしくわしえふ (陸平永寶)陸平永寶の初鑄は桓武天皇の延暦十五年一月で、經八分八厘から七分六厘程、重量一匁一分三厘乃至七分二厘あつて現存してゐる。延喜の帝の時には、延喜七年十一月に延喜通寶の鑄造あつて、これも現存してゐるが、陸平永寶といふものは古書に見當らない。

りくわりくえふしくわしえふ 龍の氣さしの六六鱗、沸つて落つる水の勢、鰭をたいて龍門の(會稽出)

りくわりくえふしくわしえふ (六六鱗)龍をいふ。龍の兩面に、頭から尾までいづれも一列に黒點ある鱗三十六枚列んでゐる。龍の氣さしの六六鱗とは、鰭は後に龍となること俗説によつてかくらうたので

りくわりくえふしくわしえふ

管絃の細遊に浮べられた船である。
りゆうめ 欲天の阿修羅王龍馬に駕せしもかくやらん(用明天皇) たとひ龍馬千匹萬匹にもせよ(百目曾我)

〔龍馬〕龍踏といふに同じ。駿馬をいふ。周禮に「馬八尺以上爲龍」。李白の白馬篇に「龍馬花雪毛、金鞍五陵紫」。

*りゆうもん しんぞ逢ふ夜の緋縮緬、龍紋の幅廣を戀に解いたる勢なり(騷物語)

〔龍紋〕龍紋の詠か。地質厚く、織目斜に高く、光澤のない絹布。絹布重寶記に「龍紋、尺巾、正もの也」と。和漢三才圖會・卷二十七に「素綉、俗云利字毛牟、按素綉出中華及朝鮮、地似無紋綉而厚強、又有文紋素綉、共不光澤」。二の文は、龍紋に龍門、戀に龍をいひかけ、龍門の鯉の淵登りの勢をきかせたのである。

*りようがん 如何なる折にか龍顔を拜すべき(國性爺後日)

〔龍顔〕天子の御顔の相にいふ。天子の御顔。史記・漢高祖紀に「高祖爲人陸渾而龍顔」。*りようら 綾羅錦緞を身に纏ひ(夕霧)

〔綾羅〕綾はあやぎぬ、「羅」はうすぎぬ。宋史・食貨志に、「東川湖南綾羅綺七萬匹」張華の經游篇に「婢妾隨綾羅」。

陵王の樂の面



(面王陵) (觀所圖樂舞)

舞樂圖説舞面の部に、「陵王、左舞、右舞、頭上戴、頭上戴、舞高鼻、開口頭、頭上戴、躍、舞、首吐、火者」。

*りよぐわい ちよつと飲んでお師匠へ、慮外ながらと禮をなす(堀川渡鼓)

〔慮外〕慮外の義より轉じて、不敬、無禮、ぶつつけの意にいふ。貞丈雜記・卷十五に、「慮外といふはおんばかりのほかに讀みて思の外といふ詞なり、今江戶にて無禮のことを慮外といふは非なり」。

りよどろびん 呂洞賓は劍に乗る(國性爺後日)

道書にも、呂洞賓が袖の中の青蛇を抛つて黃龍に乗せしは、身の中の蓬萊山を唯心の淨土と表したり(用明天皇)

〔呂洞賓〕名を巖といひ、唐時代京兆の道士で、神仙の術を學び、俗に八仙の一と云ふ。列仙全傳に「呂巖字洞賓、…遇火龍靈、一俤天遁劍法、…洞賓既得房房之道、兼火龍靈、隱居化四百餘年」。

りよぶがせきとめ 異國の呂布が赤兔馬もこれにばいかでまさるべき(源義經)

〔呂布が赤兔馬〕呂布字は奉先、支那後漢末(三國時代)の人、董卓を誅した武功によつて、侯に封ぜられ、後魏の書撰と戦ひ敗れて縊殺さる。布魯て良馬を飼ふ、その馬を赤兔といふ。後漢書列傳第六十五、呂布傳に「布常飼良馬、號曰赤兔、能馳城、城、驅」。

*りよりのつ 絲竹呂律の聲碎に(天鼓)

〔呂律呂も律も音樂十二律の中に屬す。呂は

陰に屬する音調で、律は陽に屬する音調である。松田健輔・補註漢說紀聞(寫本)に、「呂律のこと、和漢の相違あるれば秋として、これ相違の相違なり」と見えてゐる。天鼓の二の文につきては「同じく寶の鼓をす云云」を見よ。

りり 森森たる人品千丈(川中島)

〔森〕森たる人品云々を見よ。

りんきかろ 急な所の怙氣講と、をかしさどつともたまられず(輝丸)

〔怙氣〕勇女相集つて互に扶夫の惡性又は其情婦を誇つて語り合ひ、互に怙氣講に對する辯論をゆるめることといふ。井原西鶴傳・好色一代女卷之三、妖姫富洲女の條に「今宵もまた長女、身分高き女の其召使女等と共に、互に扶夫の情婦を惡み誇り合ふことを記してある。但言集覽に「怙氣講とは下賤のかか等の密合ひて今の無盡講の事をするを云ふ、かかの密合なれば其夫の事を誦る故に怙氣講の名あるなり」。

りんざう りんざう多寶塔引聲堂(聖徳太子)

〔釋迦大藏經を納め、機輪を設けて運轉するやうにしてある經藏。大阪の四天王寺には輪藏あつて藏經四百八十部を藏してある。)

*りんし 兄義貞鎌倉追討の繪旨を蒙り(平定次)

〔稱旨〕天皇の勅旨。「りんげん」と併せ見よ。りんすか、内方に居さんす半七殿に一寸逢ひたう御座りんす、親方きふつとして、はていかうりんすりんすと言ふ女子ちや(女腹切) これ

から直に曾根崎へ叶はぬ用とて御座りんした(女愁)

〔あります〕のあが暗され、「まが」が「ん」になつた語で、「ありんす」といふ、京阪地方の諺詞である。遊遊笑笑に「吉原遊女の詞一種ありて他に異なる様なり、故に徒流がナンセ、リンス、シンスなどと始めとして餘國に聞かざる言葉多し、奇語と云ふべし」と見えてゐる。蓋しこれも島原言葉の名残である。川柳の句に「馬鹿らしうありんす國の面白さ」と詠んだのがあつたのも、吉原遊里をありんす國と洒落てゐるたのである。

りんせい 林清いさんしやうだいの條を見よ。

りんだう 正眞の紫苑・りんだうのあしら(聖徳太子)

〔龍膽〕りうたへ、りうたうともいひ、草の名。薬は卵狀披針形で、秋の頃、筒狀紫色の花を開く。和名抄に「龍膽和名夜夜久佐、一云通加奈、味甚苦、故以龍爲名也」。

りんによがる 娘よ妹よ兎せろ角せろとぎやつて、りんによがつてくれめせかし(女護身) 都人のごさんすより、りんによがりあつてくれめすが身にしみわたる(女護身)

〔護身〕くちやをの義。戀におつしやる。隣摩國説で「し」をりにいふことがある。「りんに」は眞にの義。「がる」は「よぎやる」ともいふ。よくおつしやるの意。「ぎやる」を見よ。

りんばうぶね 先陣にりんばうぶねを立並へ水弾を湛へ、敵の火矢を防



〔うだんり〕

がせ(百合若) 按じるに輪寶船といふことぞ、船に輪寶次條を見よ)形の水を彈く装置した船のことであらう。和漢船用律に「輪妨。後太平記に輪妨には急輪の水彈火。生輪を用と見えたり、從軍詩に連妨敵萬艘、注に六輪に曰、武王射を伐時河に出呂尚右將たり、四十七艘の妨を以て河を障と見えたり」とある。

*りんぼう 因果の小車の輪の輪寶に刻みつけ(蟬丸)りんぼうの岩を割り醉象の荒れたる勢(國性爺後日)〔輪寶〕轉輪聖王の感得せる寶器の一。旋轉應導威伏の一切の諸權を具有し、聖王遊行する時輪寶自ら轉進して、土地を平坦にし障礙を破碎すとす。

*りんもじ 御かもじ様りんもじにまづお暇といふ籬、圍ひ置かれし下邸(松風)品よく慕へ慕ふとて誰かりんもじに輪丁花(露迦)

〔假文字〕情氣の文字詞、情氣。文字詞は足利時代の末期、朝廷式微にして供御のもの備はらない爲に、女官等その名を呼ぶを忌んで何れもと言ふた露語より起つたといふ。露迦如來誕生會のこの文に「輪丁花」とあるは、ちんちやうげ(沈丁花)を配つて「情文字りん丁花」と頭韻を踏ませたのである。

*りんあ 輪廻の塵の置古(卯月潤色)輪廻を離れぬまうぜいの雑兵(弘徽殿)過ぎし事を輪廻深く言ふ氣ばさらさら無いもの(薩摩歌)十藏杖を振切つて、エエ輪廻したる女かな(田世景清)戀しゆかしは迷の(じ)め、逢ひた見たさば輪廻の業(三世相)

〔輪廻〕衆生は此處に死し彼處に生じ、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天の六道を輪轉することと車輪のめぐるが如きによつていふ。よつてまた輪廻妄執といひ、輪廻を妄執、執念の意にいふ。弘徽殿猶舊家家のこの文につきては「春は梢に咲かす待ち云云」をも見よ。

*るふ 道大親子は世間流布の重罪、上を犯すといひ只今の始末諸人の見せしめ(反藤香)頼平殿の今宵討たれ給ふとは、世間のるふに隠れなし(関八州)

〔流布〕世に弘まること、水の語方に流れ布くに喩へた語。世語。うはさ。

るりいろ (三世相) 〔瑠璃色〕瑠璃の如き色、即ち紫色に似た紺色。

るるえふ 清和天皇の後胤足利の類 萊斯波左衛門尉源義將(雪女) 〔類葉〕類類の末葉。

るるせつ 線綫にいましめずんば忽ち國のやぶれとなる(浦島) 御繼母持統天皇を押籠め線綫に苦しめ奉れば(持統天皇) 〔類葉〕線は黒紫、綫は琴の義。支那では往古歌中に黒紫で罪人を拘縛したによつていふ。新語。公治長篇に「雖在線綫之中非其罪也。」

る

るるせん 鬼界が鳥の流人歸洛の船はいづくまで参りしぞ、るるせんなどばなされずか(平家女護鳥)

〔類船〕同類の船。共に連れ立つ船。鷹筑波に「類船かやうの散る川船」とある類船も水面に「様」に散り浮ぶ川船の歌葉を連れ立つてゐる船にいひなしたのである。

れいぎよ 唐土の聖代にも囹圄と名づつて國を治むるそなへとす(浦島)

〔囹圄〕牢獄。風俗通に、「周曰囹圄、囹圄也、囹圄也、言令人幽閉思愆、改惡爲善。」

*れいし (用明天皇) 〔令旨〕「りやうじ」と訓むべきである。唐書・中宮・親王の御詞を文書に認めるをいふ。太平記大全六に「令旨。リヤウシ、シの字は濁りてよむ。文選三十六注云、秦法皇后太子稱令旨、命也、又通鑑綱目第三日、張晏曰太子稱家、故曰令、又三十八云、太子之命謂之令也。」

*れいじん (聖德太子)(三世相) 〔伶人〕舞樂を掌る人。樂人。左傳・成公九年の條に「伶人」とありて、左丘明傳に「治氏世掌樂官而善之、故後世名號樂官爲伶官。釋文云、依字作伶、……呂氏春秋・古樂篇、昔黃帝令伶倫作律、……」撰言字考節用集人倫門に、「千字文註、伶倫伐竹造管吹之、因號樂人云爾。」

れいせい (淨瑠璃文中の註記) 〔冷泉〕淨瑠璃の節に冷泉また三重などいふ名目さきざり、そは皆よりどころある事にて三河國矢矧の長が淨瑠璃姫に、牛若丸の戀せし事を十二段に作りし物語に、節附をし

れ

れりけるに、かの物語の更科冷泉諸共といへる、侍女の立ち出づるところの冷泉といふ文句の節を、冷泉よりふ節の名とれり

*れいならず 行房朝臣の御臺所御心地例ならず(岡田川) 〔不例〕違例に同じ。病氣をいふ。源氏物語・空齋の卷に「例ならぬ人侍りて」など見えて

*れいみん 上一人より公卿大夫、下黎民に至るまで(嵯峨天皇) 〔黎民〕黎は黒の義。民の首皆黒いが故に黎民といふ。庶民に同じ。書經・典篇に、「黎民於時雍。」

れいりん れいりん舞樂の聲ならで、耳にも觸れず目にも見ぬ賤女山樵の戯歌(嵯峨天皇) 〔伶倫〕伶人(その條を見よ)に同じ。樂人をいふ。伶倫はもと支那古代の樂人の名。呂氏春秋・古樂に「昔黃帝令伶倫作律云々。」

*れいれい 華臺寶鐸環珞は西吹く風にれいれいとい、いとと珠勝さ限りなし(三世相) 識情天地れいれいとに朽ちせぬもの(天智天皇) 〔麗麗〕はなやかな貌。明らかな貌。但言集覽に「れいれい。明らかなる意なり、レイレイたり、又レイレイとして居るなどいふ。」

れいろろ 八面玲瓏と明かに(用明天皇) 〔玲瓏〕光のすきとほる貌。白居易の詩に「樓閣玲瓏五雲起。」

れろかい 油掛町八百屋伊右衛門淨土宗の願ひ人、了海坊の談義に打込み(香庚申) 先年了海和尙衆生濟度の説法を此の所にて説き始め

〔淨土宗〕浄土宗の願ひ人、了海坊の談義に打込み(香庚申) 先年了海和尙衆生濟度の説法を此の所にて説き始め